高橋教授の

この人に会いたい

Vol.59

ゲスト

鳳 真由 氏

女優、元宝塚歌劇団花組

国際医療福祉大学を今春卒業した鳳真由さんは、宝塚歌劇団花組の男役スターとして活躍した異色の経歴をもつ。華やかなスポットライトを浴びる舞台から、学業の道に進んだ鳳さん。宝塚時代の秘話、芸能の世界と医療界の接点など多彩なテーマを切り口に、恩師の高橋泰教授と語り合った。

表現者から見た医療界とは……「没入感」こそ、両者の共通点

覚えきれない規則に驚く 寮生活で連帯感を強める

高橋　今回のゲストは元タカラジェンヌの鳳真由さんです。在学中に対談するのもどうかと思っていたのですが、3月の卒業を機会にお招きしました。宝塚から医療界がどう見えたのか大変興味があります。まず、そもそも、宝塚音楽学校を受験しようと思ったのはなぜですか。

鳳　私は祖母の代から宝塚大好きの家庭に育ちました。「胎教がタカラヅカ」と言っても過言でないぐらいです。実家には〝宝塚部屋〟があり、昭和1けた台の雑誌、レコードなどお宝がいっぱい置いてあります。まさに、生活の一部という感じで、自然と意識が向かい受験しました。

高橋　宝塚音楽学校の倍率はどれぐらいでしたか。

鳳　高校1年の終わりに受験したのですが、20倍ぐらいでした。これは記念受験の人も含めての数字で、しっかり準備してきた人は全体の7割程度でしょうか。レッスンを積み、予備校で準備をしてきた子は男役のリーゼントなど髪型をバッチリ決めています。ですから、ちゃんと準備している人かどうか、髪型を見ればわかります。

高橋　無事に合格して、それまでの高校生活とは全く違う環境に入りました。一番驚いたことは何ですか。

鳳　規則の多さです。先輩との接し方、通っていい道と通ってはいけない道、行っていいお店と行ってはいけないお店、服装の色、腕時計の種類など覚えきれないほどありました。1人が何か問題を起こしたら、全員の責任だということも徹底的に教え込まれました。50人弱の同期と寮生活をするのですが、だれがどこで今、何をしているか、お互いにすべて把握して過ごす日々が続きました。「こんな世界があるんだ」と、カルチャーショックを受けました。

　高橋　舞台に立ったときの一種独特の世界観、オーラのようなものは普通の生活を送り、歌やダンスの勉強をしていただけではなかなか醸し出せません。それは歴史に培われ、生活様式も規定された歌舞伎のような伝統芸能にも共通する点だと思います。

鳳　おっしゃる通りです。宝塚歌劇団に入ると、同じような経験をされた先輩が私たちの上に果てしなくいらっしゃいます。世代の違いはあっても、一度決めたことを実行するときのエネルギー量はなかなか、ほかでは経験できないぐらいだと思います。たとえば、ラインダンスでは足を一発でそろえるという気迫がけいこ場に充満しています。それは、音楽学校時代の生活があったからだと思います。

高橋　宝塚の一ファンが「鳳真由」に変っていくわけですが、プロ精神は劇団で教えてくれるのですか。先輩からの教えを引き継ぐようなシステムがあるのですか。

鳳　強みと弱点は人それぞれですが、先輩に聞いたり、アドバイス

撮影＝関口宏紀

突き詰めた仕事の最後は感覚的 ――鳳

をもらったりすることはあります。「花」「月」「雪」「星」「宙」の宝塚歌劇団5組のうち、私が所属した花組は思い切り、伝統を重んじる組でした。皆でお酒を飲みながら、「花組の男役とはこうである」と語り合う会があったりと（笑）、熱い心をゼロから教えてもらいました。

また、10年に1回ある組対向の運動会ではバチバチ火花を散らしました。星組さんが強いのですが、公演中も奈落に玉入れを設置し出番が来る前に練習していたほどです。花組は弱く、優勝できなかったのですが、賞状をもらう練習だけはしていました（笑）。OGになった今でも集まりますが、本当に素敵な仲間たちです。

入学時の不安も杞憂に 同級生と熱い議論交わす

高橋　集団生活の積み重ねが舞台の伝統を育んでいくわけですね。話は変わりますが、宝塚から大学に入り、世界が一変したと思います。宝塚時代と学生生活を比較してどうでしたか。

鳳　30歳になったのを機に、新しい分野に足を踏み入れたいと思い、1年間の受験勉強を経て入学しました。過ごした環境も年齢も違いますし、友達は1人もできないと考えていました。でも、1人ひとりと話すうちに、同級生がどういう思いを抱いているか、わかるようになりました。そういうことを繰り返すうちに友達ができ、そのことに、まず驚きました。（高橋）泰先生をはじめ、熱い授業を経験できたのはいい思い出ですし、世代を超えいろいろな意見を交わすことができ、楽しかったです。

高橋　大学生活を通じて、医療職と接点ができました。芸能の世界にいた立場から、医療界の人はどのように見えましたか。

鳳　そのことはコロナ禍になって特に考えました。芸能と医療は対極にあります。エンターテインメントが一時休止となり、芸能は社会に不要と見なされたと思わざるを得なかった一方、医療職はエッセンシャルワーカーのトップを走るような存在です。私自身、「今までやってきたことは何だったのだろうか」と、ちょっと愕然とした時期がありました。そんなこともあり、医療者と表現者の間の共通点を卒業論文のテーマに選びました。

高橋　その卒論は大学の優秀論文賞に選ばれましたね。

鳳　医療者と表現者の方、それぞれ2名に中立な立場でインタビューしました。「なぜ、この仕事をめざしたのですか」「壁に突き当たったことありますか」など同じ質問を用意したのですが、両者には共通点がとても多いことがわかりました。自分の情熱をどの方向に燃やし、仕事をどう達成するかのベースは医療職も芸能関係の仕事も一緒だと気づきました。

鳳　真由
Mayu Otori
女優、元宝塚歌劇団花組
おおとり・まゆ●東京都小平市出身。2005年、宝塚歌劇団に91期生として入団。花組公演「マケラシュ・紅の墓標/エンター・ザ・レビュー」で初舞台を踏んだ後、花組に配属。10年、「虞美人」で新人公演初主演を務めるなど花組の主要メンバーとして活躍した。16年、花組大劇場公園「ME AND MY GIRL」で退団。18年、国際医療福祉大赤坂心理・医療福祉マネジメント学部に進学。学業のかたわら、21年には「エリザベート・スペシャル・ガラ・コンサート」に出演した。診療情報管理士の資格を持つ。

大学で広がった関心の対象 「表現」をテーマに講義へ

高橋　医療者と表現者の共通点とは何ですか。

鳳　言語化すると、「没入感」です。医療職の一人は心臓外科の先生で、難解な手術に成功したとき、あまり詳しく覚えていなかったという事例があったそうです。集中して手術に没頭していたため、手は勝手に動き、周りに的確な指示を出していた――。そのような没入感が自分を引っ張っていたということです。

一方、表現者のインタビュー対象者は尊敬する宝塚歌劇団の先輩と歌舞伎役者の方でした。舞台と客席、宝塚の場合だとオーケストラが一体となったときに、ふと、自分が自分でなくなるような瞬間があるそうです。気付いたら終わっていたような……。そのときはすごく心地よく、お客さんや共演者の反応もいいということです。

舞台と手術の集中時の感覚は近い ――高橋

高橋　私もライブを開催してルイ・アームストロングやビリー・ジョエルなどを没入して歌うことがありますが、そう言われてみると外科医が手術に集中している時の感覚と、舞台の感覚は近いというのは当たっていると思います。

鳳　もう1つ、共通点があります。心臓外科の先生によると、先輩の教えは「メスを入れる場所を飽きるまで見つめ続ければ、血管が見えてくる」など抽象的だそうです。ただ、その言葉を信じて見ていると、最初は見えなかったものが本当に見えてくるそうです。宝塚時代、私も「先輩を穴があくまで見なさい」と教わり、自分にないものをゼロから形成し、格好いいもの、美しいと思うものを肉付けしていく作業をしました。突き詰めた仕事の最後は、感覚的なものだと思います。

高橋　大変面白い視点ですね。最後に、これから進む道についてはどのように考えていますか。

鳳　今、（出身地の東京都）小平市の観光まちづくり大使、環境審議会委員をさせていただいており、医療や環境に関心があります。その他、大学や企業で、表現することなどをテーマに講義をする予定です。先ほどの卒業論文についても、「もう少し、深めた方がいい」とアドバイスを受けており、もっと勉強したいと思っています。

高橋　幼いときから、宝塚漬けの日々を送ってきたわけですが、大学での4年間を経験して、さらにいろいろな可能性が見えてきたようですね。

本日はどうもありがとうございました。

高橋　泰
Tai Takahashi
国際医療福祉大学教授
たかはし・たい●1986年、金沢大学医学部卒業、東京大学病院第1第3第2内科・麻酔科で研修。92年、同大学医学部医学系大学院医学博士課程修了（医学博士）後、米国スタンフォード大学に留学。94年、ハーバード大学公衆衛生校に武見フェローとして留学。97年4月、国際医療福祉大学医療福祉学部医療経営管理学科教授。2016年9月より21年3月まで安倍内閣未来投資会議の構造改革徹底推進会合医療福祉部門副会長を務めた。